

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

伊福部昭の団体歌：日本人作曲家による団体歌創作の一例

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河内, 春香 メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/2000044

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



伊福部昭の団体歌

—日本人作曲家による団体歌創作の一例

河 内 春 香

伊福部昭の団体歌—日本人作曲家による団体歌創作の一例

河内 春香

序

団体歌を作り、歌うという文化は、諸外国に比べてわが国では盛んであり、制作にあたっては多くの日本人作曲家がこれに関わっている。一方で、団体歌は音楽の専門外の人々によって歌われ、各団体内で演奏、享受することを前提として創作されるため、多くの点で他の音楽作品とは異なる特殊な作品ジャンルである。そのため、日本人作曲家の創作活動における団体歌の実態の把握は困難な場合も多く、音楽の分野においては研究対象としてあまり注目されてこなかった。

本論文では、日本人作曲家における団体歌創作の一例として伊福部昭(1914-2006)が作曲した団体歌全21曲をとりあげ、作品がどのように創作され歌い継がれてきたのかを明らかにするとともに、作品分析を通して音楽的特徴について考察する。伊福部が団体歌を作曲していたのは終戦直後の1948年から1980年までの約30年間であり、この間に作曲された団体歌は都道府県歌、市町村歌、校歌(小学校、中学校、高等学校、大学)、社歌、組唱歌と幅広い。伊福部が作曲した団体歌は、一般的な団体歌とは異なる独特な曲想であると評されることが多いが、分析にあたっては作品毎の時代的な背景をふまえた上で、伊福部の作品における団体歌の位置づけについても試みる。

1. 伊福部作曲の団体歌にみられる時代的な傾向

団体歌は、「人々の共同体意識と深く結びついているものであり、その団体への帰属意識や構成員同士の連帯感を高めたり維持したりする性格のものである」(渡辺 2010 :174)とされ、団体の種別によっても異なる目的と歴史をもつ。伊福部は、第二次世界大戦の終戦後から継続して団体歌を作曲しており(表1)、それぞれに作品が制作された時代や社会情勢が反映されている。

表 1：伊福部作曲による団体歌一覧

作曲年(制定年)	作品名	作詞者	拍子	調性	テンポ	備考
(1948)	釧路市立湖畔小学校校歌	風巻景次郎	4/4	D dur	Andante ♩ = 60	
1948 (1948)	那智勝浦町立字久井中学校校歌	瀧川貞蔵	4/4	D dur	記載なし	
1948 (1948)	北海道立釧路女子高等学校校歌	風巻景次郎	4/4	d moll	Andante ♩ = 60	校名の変更により現在は歌われていない
(1949)	札幌市立向陵中学校校歌	飯田広太郎	4/4	d moll	Andante	
(1952)	帯広市市歌	外山雅一	4/4	es moll	Andante ♩ = 60	
1955	福島市立平野小学校校歌	清水延晴	4/4	F dur	Andante ♩ = 60	現在は歌われていない
1955 (1955)	北海道阿寒高等学校校歌	柏倉俊三	4/4	f moll	Andante ♩ = 60	
(1957)	札幌市立琴似小学校校歌	山下秀之助	4/4	D dur	♩ = 60	二部合唱
1957 (1957)	名寄市立名寄東中学校校歌	入江好之	4/4	g moll	♩ ≒ 60	吹奏楽版あり／二部合唱
1957	全開発の歌	沢谷純一	4/4	c moll	Andante grandioso ♩ ≒ 60	四部合唱
1959	鶴川町立鶴川小学校校歌	更科源蔵	4/4	h moll	Andante ♩ ≒ 58	学校の統廃合により現在は歌われていない
1960 (1960)	北海道新得高等学校校歌	阿部戸一	4/4	c moll	Andante grandioso ♩ ≒ 48	学校の統廃合により現在は歌われていない
1961	北海道讃歌	森みつ	5/4	$\flat 2つ$ ($b\cdot\flat\cdot\flat$)	Andante grandioso ♩ ≒ 54	オーケストラ版あり
1965 (1965)	札幌創成高等学校校歌	清水武	3/4	H dur?	Andante quasi Adagio ♩ ≒ 60 ~ 50	
1965	名寄女子短期大学校歌	小池栄寿	4/4	$\flat 2つ$ ($b\cdot\flat\cdot\flat$)	Adagio ♩ ≒ 40	校名の変更により現在は歌われていない
(1966)	世田谷区立玉堤小学校校歌	阿部ナヲ	4/4	C dur	Andante ♩ ≒ 60	
1967	大洋紡績株式会社歌	佐藤勇介	4/4	B dur	Andante ♩ ≒ 63	
1968 (1968)	池田町町歌	清原千晴	4/4	As dur	Andante grandioso	オーケストラ版あり
1970 (1970)	音更町町歌	三村洋	3/4	c moll	Andante moderato ♩ ≒ 60	オーケストラ版あり
(1978)	韮崎市立韮崎北西小学校校歌	小池藤五郎	4/4	C dur	Andante grandioso ♩ ≒ 54	
1980 (1979)	釧路市立美原小学校校歌	更科源蔵	4/4	B dur	Andante ♩ ≒ 72	

都道府県歌・市町村歌

都道府県歌および市町村歌は、これらを歌うことによって各地方自治体において愛郷精神や一体感を求めるとともに、自治体の復興・飛躍を主たる目的とする¹。伊福部が作曲した都道府県歌・市町村歌は《北海道賛歌》(1961)²、《帯広市市歌》(1952)、《池田町町歌》(1968)、《音更町町歌》(1970)の4曲であり(表1)、いずれも伊福部の出身地である北海道と、北海道の市町村の歌である。

1945年以降、都道府県歌は1970年代半ばまで、市町村歌は1980年代まで特に多くの作品が制作、制定されており、上記の4曲もこの時期に制作されている。これには1946年に連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)が都道府県歌の制定を指示あるいは奨励したことが大きく関係しているとされ、「戦後の民主化に向け、強度の中央集権国家を解体し地方自治分権というかたちに移行する過程で、地方自治の意識を国民に浸透させるための一つの提案であった」(中山2012:30-33,39)といわれている。

伊福部が作曲した都道府県歌・市町村歌の中でも《帯広市市歌》はGHQが日本を去る直前に制作されており³、このような時代的な影響を受けている可能性が高い。1952年にGHQが日本から去った後も、都道府県歌・市町村歌の制作は盛んにおこなわれ、数多くの作品が制作、制定された。

校歌

校歌は各種学校の歌であり、校歌を歌うことで所属する学校への帰属意識や愛校心を育むことが目的とされている⁴。また、伊福部が作曲した団体歌の中でも校歌は全21曲中15曲と最も作品数が多い(表1)。

伊福部が校歌を作曲していた時期には、戦前・戦中に作られた校歌で時代にそぐわないものは歌詞が変更されたり、作品そのものが作り替えられたりするといったうごきが起こった。また、校歌は明治期以降、文部省の認可によって制定されていたが⁵、この頃から各学校が校歌を制定するようになり、時代の変化にともなって多種多様な校歌が生まれていった。

1 『全国都道府県の歌、市の歌』 p.39。

2 正式には北海道歌として制作されたわけではなく、1961年5月の植樹祭に天皇皇后両陛下が来道する際に演奏することが主たる目的であった。しかし、当時の北海道知事であった町村金五が北海道賛歌制定委員会の顧問をつとめ、「この賛歌が道民の歌として末永く愛唱されるよう祈ってやみません。」と述べている(初演プログラムより)ことから、《北海道賛歌》が制作された当時は北海道歌(現「北海道民のうた」)と同じ位置づけであったことがうかがえる。

3 《帯広市市歌》が制定されたのは1952年3月31日であり、サンフランシスコ平和条約の発効は1952年4月28日である。

4 『歌う国民』 p.152。校歌は入学式、卒業式などの式典、始業式、終業式そのほかの集会で歌われることが多い。また、小学校では運動会などの学校行事、中学校・高等学校では全国体育大会の開会式、野球大会等でも歌われている。

5 1893年から1942年までは文部省が校歌の制定を行っていた(『全国校歌等の歌曲認可状況一覧』より)。

社歌・組合歌

社歌は、各企業が会社の歴史や理念、理想、企業哲学を盛り込んだ自社、あるいは自社グループのための、会社を象徴する歌⁶であり、「社歌にこめられた創業者や先達の想いを共有したり、会社への理解や愛着を深めたり、社員同士の連帯感を強化することが目的」（弓狩 2011:54）とされる⁷。

伊福部が作曲した団体歌の中で、社歌は《大洋紡績株式会社社歌》⁸の一作品のみであるが（表1）、この作品が作曲された当時（1967年）の日本は高度経済成長期のただ中にあり、社歌が量産された時代でもある⁹。多くの企業が急成長し、社員数も増える中で、社員共通の帰属意識を高めることが必要とされる時代であった¹⁰。

また、表1の《全開発の歌》は全北海道開発局労働組合のために作曲された組合歌である。組合歌は労働者の歌であり労働歌の一つとして捉えられるが、昭和初期に発行された組合歌集の序文では、組合歌を歌う目的として「搾取なき社会の樹立に、自由正義のみち亘る新社会の建設に」（白楊社編集部編 1927: (3)）という言葉が添えられている。

加えて《全開発の歌》が作られた1950年代は、うたごえ運動およびそれにとまなう作品創作がさかんな時期であり¹¹、《全開発の歌》もこの動きに連動するかたちで制作されている。制作の目的や経緯について、同組合の発足15周年記念誌『全開発15年のあゆみ』にも以下のような記述がある。

労働組合のうたは、たたかう意識を高揚させそして団結のきずなをよりいっそう強めるものである。意気軒昂のときにはずんどうたう歌、苦しみにひしがれているときにうたう歌、そしてうたうことによって仲間としての連帯感を強める要素は、歌は最もその特性をもっている。

歌ごえ運動が発展のきざしをみせ、全国的に歌ごえ祭典が展開されていたこの時期に、全開発のうたを制定する必要性は誰しもが否定はしなかった（全北海道開発局労働組合編 1970:212-213）¹²。

6 『月刊総務』 p.54および『社歌』 p. 7より。

7 近年では外部に向けて会社をアピールするPRソングや会社のテーマソングとしての役割も大きい（『月刊総務』 p.54）。

8 《大洋紡績株式会社社歌》は歌詞のみが社内に保管され、楽譜が残されていなかったため、同社でも社歌がどのようなものか長らく不明であり歌われていなかった（2016年時点での調査による）。高度経済成長期に制作された社歌の多くは、会社の公式行事や朝礼などで斉唱されたり、酒席などで歌われることも多く（『社歌の力』 p.54）、同作品も制作されてからしばらくは同様の機会に歌われていたことが推測される。

9 『社歌』 p.92。

10 『社歌の研究』 p.46。

11 1940年代末からはじまったうたごえ運動は青共中央合唱部と合唱指導者であった関鑑子（1899-1973）を中心に、1950年代の全盛期には政治的な目的をこえた音楽的な広がりが見られた（『戦後から前衛の時代へ：1945-1973』 p.188）。

12 初演とあわせて録音が行われた記録が残っているため（『全開発われらのあゆみ15年』 p.214）、これを各支部などに配布し歌っていたものと思われるが、どのような機会に歌われていたか、現在も団体内で歌われているかなどは不明である。

ここではあくまで伊福部が作曲した団体歌が制作された年代の傾向のみを示したが、いずれの団体歌もそれぞれが独自のあゆみをつづけていく中で多くの日本人作曲家が制作に関わっており、伊福部もまたそのような作曲家の一人であったことがわかる。

2. 作品制作・委嘱の経緯

団体歌が制作されるきっかけは団体毎に様々であるが、最も多くみられるのが団体の周年記念事業として制作される場合である。伊福部が作曲した団体歌の内、都道府県歌・市町村歌では、《帯広市市歌》、《池田町町歌》、《音更町町歌》¹³はいずれも開基70周年の記念事業の一つとして制作された。また、校歌においては多くの場合開校の際に制作されるが、《世田谷区立玉堤小学校校歌》、《北海道阿寒高等学校校歌》のように、いずれも開校5周年の記念の年に制作されたものもある。組合歌である《全開発の歌》も同様に組合発足5周年の記念として制作されたが、これに加えて先述したうたごえ運動の高まりが大きなきっかけとなっている。《大洋紡績株式会社社歌》の制作の経緯は不明であるが、社歌は、創業時または合併などにより事業内容が一新される際に制作、制定されることが多いとされることから、同作品もおそらくこれらの機会に制作された可能性が高い。

団体歌の制作が決定した後、歌詞をどのように選定するかは団体毎に異なるが、《北海道賛歌》、《帯広市市歌》、《池田町町歌》、《音更町町歌》のように、一般公募した中から選ばれる場合もあれば、《全開発の歌》のように団体内の公募で選ばれたものもある。校歌に関しては、制作当時に在職していた校長や教員が作詞する傾向が多くみられたが、更科源蔵¹⁴（1904-1985）、風景景次郎¹⁵（1902-1960）、柏倉俊三¹⁶（1898-1996）、小池藤五郎¹⁷（1895-1982）といった文学者に作詞を依頼する例もみられる。

団体歌の作曲にあたっては、伊福部の長女である伊福部玲氏によると、伊福部自身が「知らない人から頼まれて作った校歌は、母親の郷里である福島県の1校だけ。そのほかは人のご縁で校歌を書いた¹⁸。」と話していたという¹⁹。この言葉どおり伊福部に団体歌の作曲を委嘱した団

13 《音更町町歌》については、20年前の1950年に音更村歌制定の計画があった際、何らかの理由でこれが実現せず、改めて町歌が制作された（『音更町史』p.258,266,330-331）。

14 北海道出身のアイヌ文化研究家、詩人、北海道学園大学教授、北海道文学館理事。代表作に『凍原の歌』など（『20世紀日本人名事典』p.1198）。

15 兵庫県出身の国文学者。昭和22年より北海道大学教授（『20世紀日本人名事典』p.663）。

16 山形県出身の英文学者。北海道大学名誉教授（『北海道英語英文学』42号）。《阿寒高等学校校歌》を作詞した当時は北海道大学文学部の学部長であった（『北海道新聞』2022.2.21朝刊15面）。

17 山梨県出身の国文学者。1965年より立正大学教授。《韮崎市立韮崎北西小学校校歌》を作詞した当時は既に退官している（『20世紀日本人名事典』p.974）。

18 《釧路市立湖畔小学校校歌》および《北海道立釧路女子高等学校校歌》は、当時伊福部が講師をつとめていた東京音楽学校を通じて作曲を依頼された記録が残っている（『東京芸術大学百年史：東京音楽学校篇 第2巻』p.1047,1548）。ただし、《釧路市立湖畔小学校校歌》の自筆譜には「湖畔國民学校 校歌」と書かれており、同校が「湖畔國民学校」という名称であったのは1941年から1946年であるため（『湖畔小学校六十年誌』巻頭ページおよびp.58）、東京音楽学校を通じて依頼される1948年以前に伊福部に依頼があった可能性が高い。

19 『北海道新聞』2022.2.21 朝刊15面。

体は、伊福部の出身地である北海道内の団体が最も多い²⁰。作曲を委嘱した詳細な経緯は、現在では情報が失われている団体も多いが、伊福部が幼少期を過ごした音更町をはじめ伊福部の北海道時代に縁があった市や町から、もしくは作詞者が伊福部と同郷の知人であったことから委嘱を受けている場合が多くみられる。

また、北海道内の団体では、伊福部が郷里を代表する作曲家であるという意識が強くみられる。作曲を委嘱された時期は、ちょうど伊福部が映画音楽作曲家として注目されていた時期とも重なることから、伊福部の作曲家としての知名度が上がるにつれて、これに比例する形で委嘱の頻度も上がっていったと考えられる²¹。

3. 作品分析

各団体に残されている書簡、記念誌、校歌についてとり上げられた新聞記事等をはじめとして、伊福部が団体歌について述べた言葉は非常に限られている。さらに、伊福部はそれらの資料の中で、自身が提供した音楽に対してどのような姿勢で作曲をしているか、またどのように歌ってほしいかなどについては言及していない。

ここでは、全21曲を作品分析することで伊福部が作曲した団体歌の音楽的特徴を明らかにすることを試みる。分析にあたっては作品を歌詞と音楽とに分け、団体歌ならではの傾向を見出した上で、伊福部の作品全体にみられる音楽的特徴との共通点と相違点について考察する。

3-1. 歌詞

歌詞については、自筆譜および印刷譜、各学校の記念誌等に掲載されている歌詞を主資料とした。歌詞の分析にあたっては、団体歌の特徴をふまえた上で、団体の種別による特徴的な言葉に着目した。

都道府県歌・市町村歌

都道府県歌・市町村歌では、その土地の歴史や風土について歌われることが多いが、伊福部の作品をはじめ、戦後に作られた多くの都道府県歌・市町村歌においては、各自治体の明るい未来を歌ったものが多いことが指摘されている²²。

このような特徴は伊福部が作曲した都道府県歌・市町村歌の中にもみられ、例として《北海道賛歌》では「鐘よ 高くひびけ この国のみのりのために 鐘よ 高くひびけ この国の希望のために」（4番）という歌詞がある。この歌詞からは、上記の未来志向の意識は北海道内にとどまらず、国の発展というところにまで意識が及んでいることがわかる。

20 北海道以外の地域の団体歌については、《世田谷区立玉堤小学校校歌》は、伊福部が玉堤小学校と同じ地区（東京都世田谷区等々力地区）に居住していたことが縁で委嘱されたことがわかっている。

21 昭和期以降、著名な作曲家に校歌を作曲してもらうことによって、他校の校歌との差別化を図るというごぎがさかんであった（『音楽教育学』p.7-8）。

22 『歌う国民』p.199。

校歌

校歌の歌詞については団体歌の中で最も研究が進んでいる。先行研究からは「教育の方針、訓育的要素」、「土地、郷土の山河、自然、風景」、「土地、学校の歴史」を構成要素として持つ²³ことが指摘されており、伊福部が作曲した団体歌の歌詞にも同様の傾向がみられる。

「教育の方針、訓育的要素」の例として、『福島市立平野小学校校歌』には「きびきびと 至誠敬愛 平野小」（3番）という歌詞がある。「至誠敬愛」は現在に至るまで福島市立平野小学校の教育目標であり、この言葉がそのまま校歌にも使われていることがわかる。また、ほぼすべての校歌に学校名²⁴が含まれているのも大きな特徴である。

また、いくつかの作品からは「元気に満ちて ぼくたちは 国の柱と 育ちます」²⁵、「平和な國の花と咲く」²⁶など、都道府県歌・市町村歌と同様に学校内、地域内にとどまらない未来志向も垣間見える²⁷。さらに、具体的にこのような言葉が歌詞に含まれていない場合でも、校歌について「私たちの校歌が将来の日本推進の原動力となる北海道らしい壮大さと、芸術性においてすぐれているかがよく理解できるし、開校に当たって、先達が考えていたことも、正にそこにあったのです。」（札幌市立向陵中学校 1968 :58）と紹介している学校もあり、このような意識も戦後期の校歌の特徴の一つであることがうかがえる。

「土地、郷土の山河、自然、風景」の例として、北海道名寄市に位置する名寄東中学校や名寄女子短期大学の校歌では、市のシンボルでもある「ピヤシリ」（ピヤシリ山）、北海道釧路市に位置する北海道阿寒高等学校の校歌では「真紅舌辛」（シュンクシタカラ川）などの名称が含まれている。また、特徴的な気候をもつ北海道の校歌については、この他「雪」、「凍てつく」、「北風」、「厳しい寒さが襲っても」といった言葉がみられる。

「土地、学校の歴史」の例として、『北海道新得高等学校校歌』では、「開拓の歴史をうけて」（1番）とあり、開拓時代から発展してきた北海道の歴史が歌われている。その他の地域についても『韮崎市立韮崎北西小学校校歌』では、「武田魂身にうけて 菱にかたどる徽章です」（2番）のように、学校の所在地である韮崎市ゆかりの戦国武将、武田信玄の名が歌詞に含まれている。

ただし、同じ校歌であっても、学校の種類によって児童、生徒の年齢、各学校における教育目標が異なるため、これにともなって校歌で歌われる内容も変化する。また、小学校の校歌では、「われらもここで 学ぼうよ」²⁸「なかよしこよしは 元気です」²⁹のような、低年齢の児童でも親しみやすいような言葉遣いが多くみられ、中学校、高等学校、大学と年齢が上がるにつれて歌

23 『研究室紀要』26号 p.51-53。

24 校名が完全な形で歌われる場合と、学校名の一部が歌詞に含まれる場合とがある。一般的な校歌には校名が含まれることが多いが、校名が歌詞に含まれない校歌も多数存在する。

25 『世田谷区立玉堤小学校校歌』1番。

26 『鶴川町立鶴川小学校校歌』3番。

27 先行研究では、昭和初期の校歌においても「校歌によって担われている学校に対する人々の意識が、学校への帰属意識や愛校心にとどまるものではなく、郷土への帰属意識や愛郷心、さらには国家への帰属意識や愛国心ともつながるような性格づけをされていた」（渡辺 2010 :152）と指摘されている。戦後の校歌では敗戦からの復興、日本が経済的に発展していく中での国への帰属意識、愛国心が歌詞に表れていると考えられる。

28 『釧路市立湖畔小学校校歌』1番。

29 『韮崎市立韮崎北西小学校校歌』1番。

詞も文語体になる傾向がみられる。

社歌・組合歌

社歌・組合歌についても、社員、組合員に対する教育的要素、団体がある土地を象徴するもの、会社、組合の歴史を思わせる言葉が歌詞に含まれるなど、歌詞の特徴としてはおおむね都道府県歌・市町村歌および校歌と同じような特徴がみられる。ただし、社歌・組合歌に関しては、他の団体歌と比較して、作品制作当時の社会情勢や経済状況がより反映される傾向があり、これは伊福部が作曲した《大洋紡績株式会社社歌》にも同様の傾向がみられる。

第1章で述べたとおり、《大洋紡績株式会社社歌》が制作された当時の日本は好景気であったことから社歌の歌詞も明るい内容のものが多くとされ³⁰、同作品の「美濃の朝（あした）は 空はれぬ」（1番）といった歌詞からもこのような傾向が垣間見られる。その他、「集う人みな 産み業の 場（には）にみがきし 魂と技」（1番）、「訓（おしえ）は高き 社是のもと」（2番）といった社歌ならではの言葉も含まれている。

組合歌である《全開発の歌》は、先述したとおりうたごえ運動の影響を強く受けて制作されたが、先行研究より「“うたごえ運動”では労働の苦しみを描き連帯を求める歌が多く選ばれ創られており」（長木2010 :83）という特徴が指摘されている。このような傾向は《全開発の歌》の中では「時代の浪はあれるとも 誓った同志はげまして きたれすゝめとさけんでる」（2番）といった歌詞に表れている。また、《全開発の歌》にも「歌声あわせうでをくみ 働く者の仿ける 自由と平和の国づくり」（3番）のように、地方にとどまらない未来志向が垣間見える。

以上のことから、伊福部が作曲した団体歌の歌詞においては、作詞された年代や団体の種別に限らず、団体がある地域ごとの風土や歴史、それぞれの団体における教育的な内容を含んでいることが確認できた。さらに、日本の未来を見据えた言葉が含まれているという点においても大きな違いはみられなかった。

3-2. 音楽分析

音楽分析では、歌詞と同様、自筆譜および印刷譜を主資料とし³¹、a. 音域、b. テンポ、c. 調性・曲想、d. 拍子、e. リズム、f. ピアノ伴奏³²の観点から各作品の分析を行う。

分析にあたっては、音楽の専門外である団体の構成員が歌うことを想定して作曲されていることをふまえ、作品に対する印象、各団体でどのように演奏されている（いた）かについては各団体からの回答を適宜参照する。

30 先行研究より1960年代の社歌は「景気に比例し、明るいイメージのものが主流に。」（弓狩 2011 :54）といわれている。

31 《北海道立釧路女子高等学校校歌》、《札幌市立向陵中学校校歌》、《全開発の歌》、《世田谷区立玉堤小学校校歌》については自筆譜が散逸しているため、それぞれ筆者譜および印刷譜を参照した。

32 作品によっては、オーケストラ伴奏、吹奏楽伴奏による楽譜が存在する団体もあるが、分析にあたってはすべてピアノ伴奏による楽譜を使用した。

a. 音域

歌の旋律の音域は、最も多くみられるのが一点レから二点レまでの1オクターブ内であり、最も音域が広い作品は《鵜川町立鵜川小学校校歌》および《大洋紡績株式会社社歌》の1オクターブ+長三度である。また、最低音は《池田町町歌》の♭ラで、最高音は《那智勝浦町立宇久井中学校校歌》の二点ミまでであるが、団体の種別による音域の違いはほぼみられなかった。

b. テンポ

テンポは、Andante ♩=60と記載されている作品が最も多く、最も遅い《名寄女子短期大学校歌》ではAdagio ♩=40、最も速いテンポの《釧路市立美原小学校校歌》では♩=72の指示がある。伊福部の歌曲では一曲の中でテンポが非常に頻繁に変化するという特徴がみられるが、団体歌ではそのような指示はみられず、終始一貫したテンポで演奏される。

c. 調性・曲想

伊福部の作品全体の特徴として、西洋音楽の調性の概念とは異なる独自の音階や旋法が用いられていることが挙げられるが、団体歌の場合は調性が比較的はっきりしている作品が多い傾向にある。ただし、伊福部の団体歌の多くは、曲全体が表1に示した調性の主音・主和音を中心に展開するというよりも、冒頭から終盤までは先に述べた他の伊福部の作品と同じような調性感をもち（譜例1）、作品の最後の数小節で主音に向かう動きがみられる（譜例2）。

[譜例1：《世田谷区立玉堤小学校校歌》（冒頭）]

Andante ♩=60

あ さ の ひ お ど る た ま づ つ み げ ん き に み ち て

[譜例2：《世田谷区立玉堤小学校校歌》（終盤）]

— な る よ — へ い わ の — か ね の こ え —

さらに記譜上の特徴として、自筆譜が確認できる曲の約半数において、歌には調号が付されているにも関わらず、ピアノ伴奏にはシャープやフラットの指示が調号ではなく臨時記号として書かれていることが分かった。特定のパートもしくはすべてのパートにおいて調号を臨時記号として記譜する方法は伊福部の他の作品にもしばしばみられるが、団体歌においても、西洋的な調性感覚ではなく、自身の作曲語法を五線譜にあてはめて書いているという意識が楽譜上にも表れていると考えられる。

曲想について各団体から伊福部に具体的な注文があったかどうかは不明であるが、全体でみると長調系の作品が11曲、短調系の作品が10曲となっている。また、校歌については小学校の校歌は長調系の作品が多い傾向があり、中学校、高等学校、大学と団体構成員の年齢が上がるにつれて短調系の作品が多くなるという傾向がみられた。

短調系の校歌に関しては、歌う側には「一般的なイメージの校歌³³と違う」という印象を持たれることもあるが³⁴、伊福部の門下生で作曲家の和田薫氏は「伊福部先生は、明るい暗いの曲の雰囲気ではなく、学校の象徴としての校歌に、荘厳なイメージを投影しようとしたのだと思います³⁵。」と述べている。その他、短調で重厚な曲想をもつ《帯広市市歌》では、帯広市より「戦後間もない苦難の時代に作られた曲であり、当時の帯広の情景を想起させ、重みのある歌と感じています。」と回答があったとおり、歌詞のみならず曲そのものにも市の歴史が反映されているといえる。

d. 拍子

使用されている拍子は、4/4拍子のものが21曲中18曲と最も多い。しかし、伊福部の作品全体の特徴として挙げられる拍子の頻繁な変化は団体歌にも同様にみられる。作品の冒頭から一貫して拍子または拍子感覚が変化しない作品は全21曲中6曲のみであり、最も頻繁に拍子の変化がみられる《大洋紡績株式会社社歌》では、曲の途中で4/4拍子から2/4拍子、5/4拍子へと拍子が変化し、一小節ごとに拍子が変わる部分もみられる。

また、楽譜上での変化はみられないものの、フレーズ感や音楽的な流れから考えると明らかに拍子が変わっている作品も多数みられる。これを裏付ける例として、《鶴川町立鶴川小学校校歌》の自筆譜には、五線の下に作曲者自身が本来想定していたと思われる拍子が小さく書きこまれており、伊福部による自筆メモには「pianoノ楽譜ノ下ニ5/4 3/4等トアルノハ本来ナラ其ノ様ニ書ク可キデショウガ、小亭校児童ニハ或ハ解シ難イノデハナイカト思ワレマシタノデ4/4デ通シテアリマス。演奏ニ当ツテハ5/4 4/4 3/4ノ様ニ●（不明）タ節奏を付シテ下サイ」とある（譜例3, 4）。

33 先行研究から、昭和期以降の校歌については4/4拍子で長調、単純なリズムパターンが多用されるといった多くの校歌に共通するイメージ、校歌の均質性が指摘されている（『研究紀要』p.53-55）。

34 札幌市立向陵中学校からの回答より。一方で同校の生徒からは「小学校とは違って、中学生（大人）の仲間入りができた実感を持てた。」という言葉もきかれる。

35 『北海道新聞道東（釧路・根室）版』2019年2月22日朝刊p.17。

[譜例 3 : 《鵜川町立鵜川小学校校歌》]

Andante ♩=58

ひかり — ときぼうが い — (い) (っ)ばい に

[譜例 4 : 《鵜川町立鵜川小学校校歌》 (伊福部のメモ書きに従って拍子を修正したもの)]

ひかり — ときぼうが い — (い) (っ)ばい に

このほかの作品についても、伊福部が想定していた拍子をそのままの形で記譜するのではなく、演奏する側の混乱を防ぐために、楽譜上では可能な限り一貫した拍子で統一していることが推測される。現在歌われている校歌で「拍子の頭がどこかわかりにくい」、「難しい」、「歌いにくい」といった印象を持たれる場合があるが、それはこのような独特な拍感に起因していると考えられる。

e. リズム

リズムの特徴として、俗に「ぴょんこ節」と呼ばれる、唱歌や軍歌などで広く用いられてきた符点のリズムが歌の旋律に比較的多く使われていることが挙げられる。表1からは《釧路市立湖畔小学校校歌》、《那智勝浦町立宇久井中学校校歌》、《札幌市立向陵中学校校歌》、《全開発の歌》、《鵜川町立鵜川小学校校歌》、《北海道新得高等学校校歌》の計6曲にこのような符点リズムの使用がみられ、団体の種別に限らず伊福部が団体歌の作曲をはじめた1940年代後半と1950年代後半に集中してこのような傾向みられることが分かる。しかしながら、これらの作品において符点リズム特有の軽快な印象はあまり感じられない(譜例5)。

[譜例5：《札幌市立向陵中学校校歌》]



f. ピアノ伴奏

ピアノ伴奏に関しては、概ねどの作品も同じ伴奏型が用いられている。ほとんどの場合ピアノ伴奏の右手の最上声部には歌と同じ旋律が置かれ、その下にハーモニーとなる音や和音が付加されている。また、左手は一貫してオクターブの低音に和音³⁶が続く、もしくは強拍にオクターブの低音、弱拍に和音がおかれるという音型がほとんどである（譜例6）。

[譜例6：《大洋紡績株式会社社歌》]

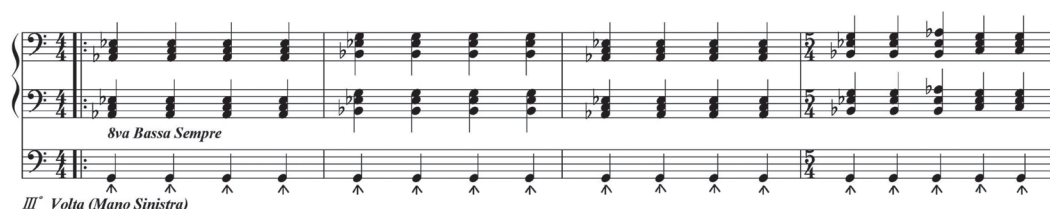
Andante ♩=63

ピアノ伴奏の右手が終始歌と同じ旋律を奏することによって、歌う側はそれを頼りに歌唱することがより容易であり、左手は1拍ごとに奏されることで音楽の流れを支える役割を持っている。そのため、このような伴奏型は団体歌の特性上、演奏する際に音楽全体を把握しやすくするためであることが推測される。

その中で《全開発の歌》は、団体歌のピアノ伴奏と言う点では異彩を放っている。同作品では、伴奏は右手も左手もすべて1拍ごとに和音のみを奏し、さらに3番を歌う際にはピアノ伴奏の左手はすべて低音でトーン・クラスターを演奏するようにとの指示がある。

36 伴奏で使用されている和音は概して長三和音、短三和音、もしくは3度の音程による2音の和音が多く使用されている。

〔譜例 7：《全開発の歌》伴奏〕



伊福部の作品でピアノのトーン・クラスターが使用されることはさほど珍しくはないが、伊福部の作品に限らず、団体歌のピアノ伴奏にこのような特殊奏法が用いられるのは非常に珍しい例である。

これらの分析結果と、伊福部の団体歌と同時期に作曲された歌曲³⁷を含む他作品と比較すると、団体歌ならではの特徴と、伊福部の作曲語法との折衷的な特徴の両方がみられることが明らかとなった。

団体歌のみにみられる特徴としては、音域、定型による伴奏が挙げられる。これらの特徴は、団体歌が特定の機会に各団体内で享受されるという性質を持つことから、団体の構成員がその場で容易に歌えるようにとの作曲者の配慮によるものであることがうかがえる。

一方で他の伊福部の作品との折衷的な特徴がみられるのが調性感と拍子の頻繁な変化である。先述したとおり、団体歌に限っては曲の最後の部分で調性がはっきりする作品が多いものの、冒頭から終盤に至るまではいわゆる西洋的な調性感は感じられない。また、拍子に関しても楽譜上は一貫した拍子であっても音楽的には拍子が変わっている場合が多い。これらは、団体歌においても伊福部の作曲語法が作中に表れていることを示している。

4. 団体歌の変容

今回の調査では、団体歌が長年歌い継がれていくうちに、伊福部が作曲したものから様々な変化がみられる例がいくつか確認できた。ただし、主な変化がみられるのは全体のテンポとピアノ伴奏においてであり、歌の旋律に何らかの変化が生じている例は現時点では確認できなかった。

テンポの変化

先述したとおり、団体歌において伊福部が設定したテンポは♩≒60という指示が最も多く、こ

37 伊福部は歌曲を全10曲作曲しており、その内団体歌と同時期に作曲された作品は、アイヌおよび北方民族の音楽に取材した《ギリヤーク族の古き吟誦歌》(1946)、《サハリン島先住民の三つの揺籃歌》(1949)、《アイヌの叙事詩による対話体牧歌》(1949) および、更科源蔵の詩による《合唱頌詩「オホーツクの海」》(1958)、《シレット半島の漁夫の歌》(1960) である。前者については、それぞれの民族が持つ独特の節回しや拍節感を活かした作品となっているため、後者の2曲を主な比較対象とする。

れを実際に演奏してみると非常に遅いテンポであることがわかる。そのため、各団体への調査から特に校歌では、現在は楽譜の指示よりも速いテンポで歌われる例がいくつもみられることがわかった。例として《葦崎市立葦崎北西小学校校歌》(4/4拍子)≒54)では「テンポがとてもゆっくりで、小学校の子どもたちのテンポに合わず歌いにくさもある。そのため、開校当時から本来のテンポよりも少し速めに歌っていた。数年経るごとに、さらにテンポを上げて歌ってきている。」³⁸といわれており、作品が歌い継がれていく中で自然に生じた変化であることがわかる。さらに、《北海道新得高等学校校歌》(4/4拍子)≒48)では「少し明るい感じになるよう、本来よりも少しテンポを速くして歌っていた時期があった。」³⁹といわれているように、テンポを速くすることにより曲想の変化を意図した例もある。

編曲

ピアノ伴奏に変化がみられる例として《那智勝浦町立宇久井中学校校歌》が挙げられる。同校では長らく伊福部が作曲したものから伴奏のみ編曲された楽譜が使用され、これにあわせて歌われていたことがわかっている⁴⁰。伴奏音型を比較してみると、伊福部の自筆譜では、右手は歌の旋律とその下にハーモニーとなる音が付加され、左手は1拍ごとに3度音程の和音を奏する指示があるが(譜例8)、編曲された伴奏では独自に付加された前奏につづいて、同じ音型を繰り返す形となっている(譜例9)。

編曲の経緯等は不明であるが、この編曲によって作品全体が主音(D)⁴¹に導かれる力を増し、より明快な印象の曲想に変化している。

[譜例8：《那智勝浦町立宇久井中学校校歌》(伊福部の自筆譜より)]

38 学校からの回答より。

39 学校からの回答より。

40 2016年に伊福部によって作曲された原曲のコピー譜が発見され、作品の実態が明らかとなった(『読売新聞大阪市内版』朝刊29面)。

41 編曲とともにD durからC durへと移調されている。

[譜例9：伴奏が編曲された《那智勝浦町立宇久井中学校校歌》]



音楽作品は原曲に忠実であるべきという考えもある一方で、これらの変化は団体歌が長く歌い継がれていく中で生じたものであり、伊福部の団体歌が現在に至るまで正に生きた音楽であることを示している。

5. 団体歌の保存と継承

団体歌は、団体外の人物によって演奏されることは極めて稀であるため、校歌が校歌集に掲載される場合などを除いて、楽譜が出版されるなど誰でも演奏できる状態にあることは皆無である。そのため、団体歌が何らかの理由で演奏される機会を失ってしまった場合、その存在自体が忘れ去られてしまう可能性が高く、このことが多くの日本人作曲家の創作活動における団体歌の実態を網羅的に把握することを難しくしている理由の一つであると考えられる。

このように団体歌は作品の管理、保存という点でも特殊な作品ジャンルであるために、作品そのものが消失してしまう危険性を孕んでいる。このことは伊福部が作曲した団体歌も例外ではない。

曲の作り替え

福島市立平野小学校で現在歌われている校歌は、伊福部が作曲したものと同一清水延晴による歌詞が使用されているが、作曲者名は「紺野五郎」と書かれている⁴²。同校の記念誌に伊福部が作曲した校歌についての記述はないが、学校からの回答より現在70代以上の卒業生の中に伊福部が作曲した校歌を実際に歌っていたという人物がいることが確認できた。そのため、校歌が制作された当初、伊福部作曲による校歌が歌われていたことは確実であるが、何らかの理由で曲のみが変更されたと考えられる⁴³。

両者は同じ歌詞であっても曲想が大きく異なっており、伊福部が作曲した校歌（譜例10）は、非常にゆっくりとしたテンポで独特の浮遊感をもった曲想であるのに対し（Andante ♩=60）、紺

42 『平野のあゆみ 平野小学校創立百周年記念誌』 p.104。

43 『平野のあゆみ 平野小学校創立百周年記念誌』 p.104には「昭和34年第二校歌制定」とあり、同ページに紺野五郎による校歌が掲載されていることから、紺野が作曲した校歌は伊福部が作曲した校歌に次ぐものという位置づけであることがわかる。伊福部の自筆譜に書かれている作曲年は1955年とあるため、第二校歌とされている現在の校歌が制定年である1959年から歌われていたとすると、伊福部作曲による校歌が歌われていたのは実質4年間であったことが考えられる。

野によって作曲された校歌（譜例11）は「♩=104位 あかるく、かわいらしく」との指示とともに、速いテンポの軽快な曲想となっている。

〔譜例10：伊福部作曲による《福島市立平野小学校校歌》〕

Andante ♩=60

もものはな うすくれないに なしのはな しーろくさきつぐ

〔譜例11：紺野五郎作曲による《福島市立平野小学校校歌》〕

♩=104位 あかるく、かわいらしく

もものはな うすくれないに なしのはな しーろくさきつぐ

生徒からの要望による新校歌の制定

《福島市立平野小学校校歌》のように、伊福部が作曲した曲が後に変更された例は他にもみられる。《北海道立釧路女子高等学校校歌》は校名の変更にともない制作されたが、校歌が披露された直後に別の作曲者に改めて作曲を依頼することとなった。これは校歌の制定と同時期に公開されていた映画「颱風圏の女⁴⁴」に、《北海道立釧路女子高等学校校歌》と同じ旋律が使われていたことに対する反発があったことが大きな理由であり、生徒からの要望に応える形で新たな校歌に変更された。

「幻の校歌」と題された卒業生の回想では、「この曲が映画—大風圏の女（ママ）—にあらわれたときは、学校中が大さわぎとなり憤慨した校友会などの申し出もあり⁴⁵、学校では、長谷川良夫氏に作曲を依頼し」（釧路江南高等学校創立六十周年新制三十周年記念事業協賛会 1980：12）とある。そして今回の調査により、この回想にあるとおり映画「颱風圏の女」のクライマックスで《北海道立釧路女子高等学校校歌》と同じ旋律が印象的に使用されていることが確認でき

44 1948年9月6日公開（制作：松竹）。監督：大庭秀雄、主演：原節子、山村聰。主人公の久里子（原節子）を含む密輸船の船員5人の人間模様と、沿岸警備隊から逃れて上陸した黒島で遭遇した中央気象台黒島支社の所員たちとの関わりを描く。

45 映画「颱風圏の女」は密輸グループを主とした物語であり、劇中では妖艶な魅力を持った主人公の女性をめぐる暴力沙汰や殺人が頻発する。このことも同映画に使用されているものと同じ旋律が校歌に使用されることに対する反発が起きた一因と推測される。

た(譜例12,13)⁴⁶。

[譜例12：伊福部作曲による《北海道立釧路女子高等学校校歌》⁴⁷]



[譜例13：映画「颱風圏の女」より⁴⁸]



記録では「(1948年) 八月末東京音楽学校講師伊福部昭氏の作曲になる新校歌が生まれた。」(北海道釧路江南高等学校創立80周年記念誌編集委員会 1998 :74) とあり、「颱風圏の女」が一般公開されたのは1948年9月6日であることから⁴⁹、「颱風圏の女」の音楽と《北海道立釧路女子高等学校校歌》が作曲された時期は1948年のほぼ同時期であると推測される。伊福部がどのような意図で同じ旋律を使用したかは不明であるが、他の団体歌とは明らかに曲想が異なっている。後に風巻景次郎による同じ歌詞に、長谷川良夫(1907-1981)による曲(譜例14)がつけられることとなったが、映画の公開時期から考えると、伊福部作曲による校歌が歌われるようになってからすぐに先述した騒動が起こり、ほどなくして新たな校歌が作曲されたことがうかがえる。

また、伊福部が作曲した《北海道立釧路女子高等学校校歌》について「教師は校歌を教える際「新しい校歌だから覚えなさい」と言うばかり。この校歌がなぜ、新しい時代にふさわしい校歌なのかを教えませんでした。合理的説明がなく、やることが雑でした。(中略) 私はいっぺんも歌いませんでした。」「校歌は学校の魂です⁵⁰」という別の卒業生の発言からは校歌に対して並々ならぬ強い思い入れがあったことがわかる。このような発言からは、終戦直後という時代の転換期にあって生徒における校歌に対する意識の高さ、校歌の影響力がより強い時代であったことがうかがえる。

46 劇中では同じ旋律が以下の①②の場面で2度使用されている。

①台風に巻き込まれた中央気象台黒島特別支所の中で、主人公の久里子が気象観測技師の天野に向って静かに語り始めるところから3分ほど譜例13に示した旋律がヴァイオリンで奏される。

②恋人である木島に撃たれた久里子が自身の想いを吐露する場面から映画の終わりまで譜例13の旋律が流れつづける。ここでは同じ旋律が弦楽伴奏によるコーラスによって歌われる。

47 1番の歌詞は、筆写譜には「まどにひかるそらよ」と書かれているが、「まどにうつるそらよ」の間違いである。

48 現時点で楽譜が散逸しているため、筆者の採譜による。

49 松竹株式会社HP『松竹』【作品データベース】颱風圏の女。

50 『北海道新聞道東(釧路・根室)版』2019年2月19日朝刊p.17。

[譜例14：長谷川良夫作曲による《北海道立釧路女子高等学校校歌》⁵¹⁾



作品の消失

近年、団体の解散または合併、統合による名称の変更によって団体歌が歌われなくなる例が増加しており、伊福部が作曲した団体歌についても既に5校の校歌が様々な理由によって歌われなくなっている(表1)。さらに、現在歌われている校歌の中にも、義務教育学校への移行等にもない将来的に歌われなくなるおそれがある作品が含まれている。

伊福部が作曲した団体歌は幸いにも自筆譜を含む多くの楽譜資料が現存しているため、たとえ各団体内で日常的に歌われなくなったとしても作品を演奏すること自体は可能である。しかし、作品を歌うことによって団体への帰属意識等を育むといった団体歌の本来の役割は失われてしまう。

結

伊福部によって作曲された団体歌は、歌詞、音楽共に作品が制作された時代、社会の機運を反映しつつ様々な変化も伴いながら歌い継がれてきた。そして作品分析からは、伊福部が作曲した団体歌は伊福部の純音楽作品に共通する音楽の特徴を有しており、そこへ音楽の専門家ではない団体の構成員であっても容易に歌えるための配慮がなされていることが明らかとなった。

伊福部自身の作曲語法が色濃く表れている作品については、一般的な団体歌のイメージと異なる難解な印象を持たれる場合も多々あるが、これは実際に歌う側や聴く側が伊福部の音楽について事前にどの程度認識していた(いる)かによると考えられる。

特に各団体が伊福部に作曲を委嘱する際、伊福部の音楽についてある程度の認識を持って委嘱した場合と、自分たちと縁のある著名な作曲家であるということを主な理由として委嘱した場合があることが推測され、後者であれば完成した作品に対して想定外の曲想であるという印象を持つことは想像に難くない。しかし、ありふれた曲想の団体歌を求めるのであれば、これを作曲することは伊福部でなくとも可能であり、伊福部からしてみると相手が伊福部の作風を事前に知った上で委嘱したと解釈するのが自然である。伊福部が自身の作曲語法をどの程度意識的に団体歌に反映させたかは不明であるが、伊福部の団体歌に対して「暗い」、「重い」という感想が聞かれたり、団体が存続しているにもかかわらず他の作曲家の曲に変更されたりといった例では、このような齟齬も一因と考えられる。

伊福部自身が団体歌という作品ジャンルについてどのような意識をもっていたかについては、自身のファンからの「校歌のみを集めた曲集を作りたい」⁵²⁾という提案を断っていることから、通

51 『創立六十周年新制三十周年記念』p.11。

52 『北海道新聞道東(釧路・根室)版』2019年2月21日朝刊, 19。

常の音楽作品とは明らかに異なる意識をもっていたことがわかる。伊福部に限らず団体歌の作曲は与えられた歌詞に、歌う人や歌われる場所、目的も限定的な各団体に合わせた曲を用意する必要がある。そのため作曲家にとって団体歌の作曲は非常に制約のある中での作業であり、団体歌が作曲家の創作活動において他の音楽作品と同列にみなされることはほばない。

しかし、それでも伊福部の団体歌には他の作曲家による団体歌とは一線を画した音楽的特徴があらわれていると同時に、映画音楽との関係にみられるように団体歌が他の作品ジャンルとも深く関係している。そして、伊福部のような作曲家の場合、団体歌をはじめとした音楽の専門外の人々を対象とする作品においてもなお失われない特徴こそが、その作曲家の音楽の本質的な特徴ともいえるのではないだろうか。

本論文では主に音楽に着目したが、団体歌の中には歌詞においても著名な作家や詩人が作詞をしている例が多くみられ、団体歌の消失とともにこれらも失われてしまう可能性がある。団体歌は音楽作品の中でも特殊な作品ジャンルではあるが、作品が失われないように保存・継承していくことも、団体歌を制作し、それを歌うという文化について考える上で重要な課題である。

謝辞

校歌の調査に関しましては⁵³、釧路市立美原小学校校長 小川一法先生、札幌市立向陵中学校校長 原田之彦先生、札幌創成高等学校校長 小島修二先生、世田谷区立玉堤小学校校長 伊藤修久先生、那智勝浦町立宇久井中学校校長 坊信次先生、韮崎北西小学校校長 山口正文先生、福島市立平野小学校校長 渡邊裕樹先生、北海道阿寒高等学校校長 吉田光利先生、北海道新得高等支援学校校長 汐川裕彦先生、むかわ町立鶴川中央小学校校長 荒木英弥先生、各学校の音楽科の先生方にも貴重な資料、情報を多数ご提供いただき深く感謝いたします。

都道府県歌、市町村歌に関しましては、北海道庁、池田町役場、音更町役場、音更町図書館、帯広市役所、北海道放送、北海道新聞社、北海道新聞釧路支社のみなさまより資料、情報をご提供いただきました。誠にありがとうございました。

(本学講師＝付属高等学校)

参考文献

- 伊福部 昭 2016『伊福部昭の団体歌』根岸一郎、河内春香（スリーシェルズ 3SCD0027）
内田 るり子編 1971『伊福部昭歌曲集』（東京：全音楽譜出版社）
大倉 玄嗣 2022「『校歌』物語 阿寒高校①炭鉱時代から脈々と」『北海道新聞道東（釧路・根室）版』2022年2月7日朝刊, 11
大倉 玄嗣「『校歌』物語阿寒高校③「祈り」壮大なスケールで」『北海道新聞道東（釧路・根室）版』2022年2月9日朝刊, 17
大倉 玄嗣「『校歌』物語阿寒高校④タンチョウ見た感激 歌詞に」『北海道新聞道東（釧路・根室）版』2022年2月11日朝刊, 15

53 以下、2023年3月時点の情報を記載。

- 音更町史編さん委員会編 1980『音更町史：昭和55年版』（北海道：音更町）
- 木部 与巴仁 2014『伊福部昭の音楽史』（東京：春秋社）
- 芸術研究振興財団；東京芸術大学百年史編集委員会編 2003『東京芸術大学百年史：東京音楽学校篇 第2巻』（東京：音楽之友社）
- 小林淳 1998『伊福部昭の映画音楽』（東京：ワイズ出版）
- 小林淳 2004『音楽と映像の交響：上』（東京：ワイズ出版）
- 小林淳 2005『音楽と映像の交響：下』（東京：ワイズ出版）
- 椎名 宏智 2019「伊福部昭「幻の校歌」発見 釧路女子高等学校1948年作曲の写譜」『北海道新聞』2019年2月7日夕刊, 8
- 椎名 宏智 2019「伊福部昭 幻の校歌：釧路女子高等学校 上 歌わなかった理由」『北海道新聞道東（釧路・根室）版』2019年2月19日朝刊, 17
- 椎名 宏智 2019「伊福部昭 幻の校歌：釧路女子高等学校 中 作り手の思い」『北海道新聞道東（釧路・根室）版』2019年2月21日朝刊, 19
- 椎名 宏智 2019「伊福部昭 幻の校歌：釧路女子高等学校 下 曲の特徴と価値」『北海道新聞道東（釧路・根室）版』2019年2月22日朝刊, 17
- 松竹株式会社 n.d.「【作品データベース】颱風圏の女」（『松竹』ホームページ内）
<https://www.shochiku.co.jp/cinema/database/02496/>
- 須田 珠美 2016「学校校歌作成意図の解明—東京音楽学校への校歌作成依頼状に着目して」『音楽教育学』46/2, 1-12
- 須田 珠美 2020『校歌の誕生』（京都：人文書院）
- 須田 珠美 2020「近代日本の小学校にみる校歌の歌詞の変容と郷土との関わり」『音楽教育学』49/2, 13-24
- 長木 誠司 2010『戦後の音楽：芸術音楽のポリティクスとポエティクス』（東京：作品社）
- 寺岡 寛 2017『社歌の研究：もうひとつの日本企業史』（東京：同文館出版）
- 富樫康ほか著 1992『伊福部昭の宇宙』（東京：音楽之友社）
- 中山 裕一郎監修 2012『全国都道府県の歌・市の歌』（東京：東京堂出版）
- 名寄市立大学 n.d.「沿革・機構」（『名寄市立大学』ホームページ内）
https://www.nayoro.ac.jp/guide/information/enkaku_kikou.html
- 日外アソシエーツ株式会社編 2004『20世紀日本人名事典 あ-せ』（東京：日外アソシエーツ）
- 日本戦後音楽史研究会編 2007『戦後から前衛の時代へ：1945-1973』（東京：平凡社）
- 白楊社編集部編 1927『労働歌及組唱歌』（東京：白楊社）
- 北海道英語英文学会〔編〕1997「特集：追悼 柏倉俊三先生」『北海道英語英文学』42, 巻頭
- 水崎 富美 2000「明治後期の校風養成と近代校歌の成立—学校行事再編のための「校訓」・「郷土」・「歴史」・「ジェンダー」」『研究室紀要』（東京：東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室）29, 49-56
- 柳澤類壽原作、八木隆一郎脚色、大庭秀雄監督2013『颱風圏の女：あの頃映画 松竹DVDコレクション』（松竹株式会社DB-5391）
- 弓狩 匡純 2006『社歌』（東京：文藝春秋）
- 弓狩 匡純 2011「『社歌』は日本独自の企業文化。 その変遷から近代産業史が見えてくる」『月刊総務』49/11, 54-57.
- 渡辺 裕 2010『歌う国民：唱歌、校歌、うたごえ』（東京：中央公論新社）
- n.n. 2002「『ゴジラ』のテーマ作曲した伊福部昭氏 手書きの譜面を発見」『北海道新聞道北（名寄・士別）版』2002年7月9日朝刊, 20
- n.n. 2003「ゴジラのテーマ曲作曲者 新高への想い」『十勝毎日新聞』2003年1月28日夕刊, 7
- n.n. 2011『文部省による『全国校歌等の歌曲認可状況一覧』：明治・大正・昭和』（不明：伊藤潮）
- n.n. 2016「宇久井中学校歌収録 伊福部さん作曲CD」『読売新聞大阪市内版』2016年10月7日朝刊, 29

記念誌

- 釧路江南高等学校創立六十周年新制三十周年記念事業協賛会編 1980『創立六十周年新制三十周年記念』（釧路：釧路江南高等学校）
- 釧路江南高等学校創立80周年記念誌編集委員会編 1998『八十年史：創立80周年・校舍落成記念』（釧路：釧路江南高等学校）
- 釧路江南高等学校創立90周年記念誌編集委員会編 2009『九十年史：創立90周年記念』（釧路：釧路江南高等学校）
- 釧路市立湖畔小学校編 1978『湖畔小学校六十年誌』（釧路：釧路市立湖畔小学校六十周年記念協賛会）
- 釧路市立美原小学校編 2008『釧路市立美原小学校開校30周年記念誌』（釧路：釧路市立美原小学校）
- 札幌市立向陵中学校編 1963『向陵のあゆみ：開校十五周年記念誌』（札幌：札幌市立向陵中学校）
- 札幌市立向陵中学校編 1968『開校二十周年記念誌 向陵のあゆみ』（札幌：札幌市立向陵中学校）
- 札幌市立琴似小学校開校百周年記念誌編集委員会編 1987『つまご：札幌市立琴似小学校開校百周年記念誌』（札幌：札幌市立琴似小学校）
- 札幌創成高等学校 2022『創成：2022学校要覧』（札幌：札幌創成高等学校）
- 全北海道開発局労働組合編 1970『全開発史 われらのあゆみ15年』（東京：労働旬報）
- 全開発35年史編集委員会編 1987『全開発史 われらのあゆみ35年』（北海道：全北海道開発局労働組合）
- 名寄市立名寄東中学校開校50周年記念事業協賛会 2002『名寄市立名寄東中学校開校50周年記念誌』（名寄市：名寄市立名寄東中学校）
- 平野小学校創立百周年記念事業実行委員記念誌発行委員会編 1974『平野のあゆみ 平野小学校創立百周年記念誌』（福島：平野小学校創立百周年記念事業実行委員記念誌発行委員会）
- 北海道阿寒高等学校創立三十周年記念誌事業協賛会出版部編 1980『阿高三十年誌』（釧路：北海道阿寒高等学校創立三十周年記念事業協賛部）
- 北海道新得高等学校 2018『閉校記念・創立七十周年記念誌 北海道新得高等学校』（新得町：北海道新得高等学校）

楽譜等

- 『校、社、市町村歌』手稿譜（東京音楽大学付属図書館所蔵）
- 『山梨県立韮崎市立北西小学校校歌』手稿譜（東京音楽大学付属図書館所蔵）
- 《釧路女子高等学校校歌》筆写譜
- 《北海道賛歌》初演プログラム